

日本古代の都城を造る

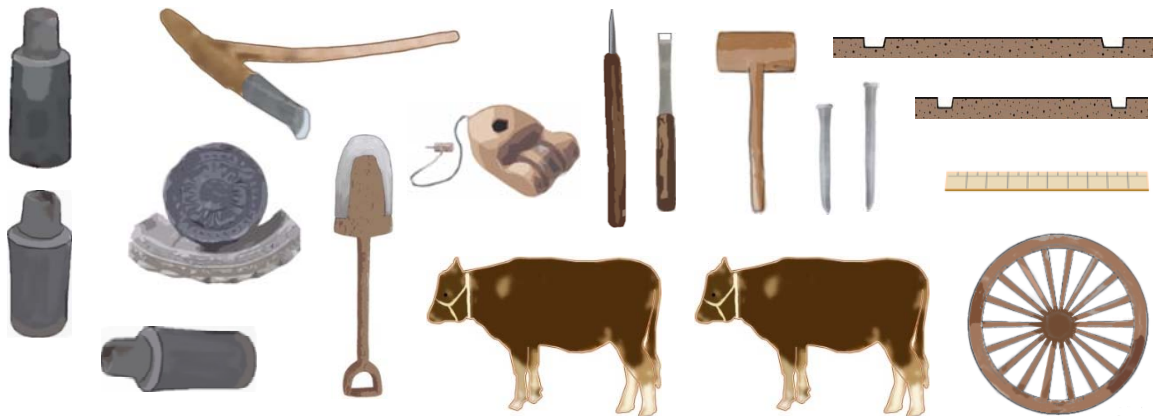
日時：2015年12月19日(土) 10:00～17:30
会場：奈良女子大学 文学系N棟N202教室

申込不要
入場無料

プログラム

- 10:00～10:05 挨拶 出田和久（古代学学術研究センター長）
- 10:10～10:40 日本古代都城の造営―問題提起として―
館野和己（奈良女子大学）
- 10:40～11:20 平城宮周辺の造営工事―佐伯門前と朱雀門前の事例から―
神野 恵（奈良文化財研究所）
- 11:20～12:00 平城京造営と造営集団について 佐藤亜聖（元興寺文化財研究所）
（休憩）
- 13:00～13:40 平城京東市の造営と東堀河の掘削 池田裕英（奈良市埋蔵文化財調査センター）
- 13:40～14:20 難波宮・京の設計と実際 市川 創（大阪文化財研究所）
（休憩）
- 14:30～15:10 長岡・平安宮の造営の実態 西森正晃（京都市文化財保護課）
- 15:10～15:50 『萬葉集』にみる都造り 奥村和美（奈良女子大学）
（休憩）
- 16:00～17:30 討論

司会 出田和久・前川佳代（古代学学術研究センター協力研究員）





あらまし

都城制研究集会は第10回目を迎えました。これまで様々なテーマでシンポジウムを行ってきましたが、今回は初心に戻り、都城を造ること自体を問題に取り上げることにしました。

桓武天皇の時代、延暦24(805)年12月に行われた徳政相論において、藤原緒嗣が「方今天下の苦しむところ、軍事と造作也」と主張しましたが、その「造作」とは平安京の造営のことでした。都城の造営は、大きな財政負担と民衆の苦しみの元となるものでした。それでも天皇・為政者は、造都に多大なエネルギーを払ってきました。

そこでは大規模な都城の設計方針がまず重大な問題となり、ついでそれに基づいて正確に、かつ組織的、効率的に造営することが課題となり、様々な困難を乗り越えて都城が完成しました。

本研究集会では、平城京・難波京・長岡京・平安京を舞台に、最新の発掘調査の成果に基づいてこれらの問題に迫るとともに、『万葉集』の歌からうかがえる造都への心性を探っていきます。

